初島住彦* ： 九州産ツチトリモチ類新知見

S. HATUSIMA* : A New Noteworthy Species of *Balanophora* from Kyusyu

1. **キュウシュウツチトリモチ　Balanophora kiusiana** OHWI　筆者[2]は1962年8月20日熊本県五家荘の樅木から宮崎県の上椎葉ダムに越す峠の海抜1500m位のサワグルミ，イタヤカエデなどの林内と，樅木から登った上福根山の九合目（海抜約1500m）で一種のツチトリモチを採りミヤマツチトリモチと鑑定し九州新産として発表した。その後，遠藤[3,4]は1963年8月17日大分県直入郡久住町に属する久住山南面海抜1200mの地点のミズナラ，ブナ，シラキ，カエデ類，タンナサワフタギ林のタンナサワフタギの根に寄生している本種を採っている。大井[5]はこの遠藤から送られた標本及び写真を研究し九州産はミヤマツチトリモチとは別種だとして同氏の大日本植物誌（改定版）の533頁に遠藤のとった写真を加え *B. kiusiana* OHWI（キュウシュウツチトリモチ）なる裸名を発表した。更に宮崎大学の平田[6]は1965年10月日向霧島山のエビノ高原の六観音旧道（海抜約1200m）で黒く朽ちはててコミネカエデに寄生していたものを採った外，1966年7月21日と8月にやはりエビノ高原の高原ホテル付近（海抜1200m）でキリシマミズキに寄生していたものを採っている。また，日向市富島高校の南谷[7]は1968年8月宮崎県と熊本県の境にある国見岳の海抜1400m付近でカエデ類（おそらくウリハダカエデ）に寄生しているものを採っている。

上記の通りキュウシュウツチトリモチは只今のところ九州の南は霧島山から北は久住山に及んでいることが判る。生育地は大体海抜1200～1500mの温帯林で寄主はカエデ類（コミネカエデ，ウリハダカエデ）が多いがタンナサワフタギ，キリシマミズキも確認されている。出現時期は7月下旬から8月下旬位までである。

次に本種とミヤマツチトリモチとの関係であるが大井が本種を独立種とした時の区別点は次のようである。

1. 花序は橙赤色，卵状短円柱形。……ミヤマツチトリモチ
1. 花序は淡黄褐色，卵形。……キュウシュウツチトリモチ

すなわち，両者の区別点は花穂の形と色である。キュウシュウツチトリモチの花穂の形は遠藤，平田の写真では卵形であるが小生が五家荘で採ったもの（HATUSIMA & SAKO 27057）は卵状円柱形で3個体の長さと幅の割合は腊葉で3.5×1.8cm，2.5×1.3cm，2.5×1.4cmである。花穂の形はツチトリモチ同様，生育度や採集時期でかなりの変化があるようである。

次に花穂の色であるが筆者は残念ながらミヤマツチトリモチの生品を見たことがないが大井，牧野は橙赤色とし渡辺[1]は橙黄色としている。一方キュウシュウツチトリモチは大

* 鹿児島大学農学部（Facult. Agric. Kagoshima Univ.）

井は淡黄褐色とし平田は枯草色で後に多少赤味をおびると述べている。小生が見た五家荘のものは少し汚れた淡黄褐色であった。

要するにキュウシュウツチトリモチはミヤマツチトリモチより色がやや淡いことは事実のようであるがこの辺の区別はなかなかデリケートで色々の段階があるものと思われる。

平田によると霧島山における本種の寄生根は年を経ると径5～6cm の大きい木こぶとなり，発生地では木こぶがごろごろと地床にころがっているとのことである。渡辺によるとミヤマツチトリモチにもかかる木こぶができることが多いということでこの点でもミヤマツチトリモチに似ている。また，渡辺によるとツチトリモチは排水良好な地点に現われるがミヤマツチトリモチは好んで谷川の縁，或は降雨の折に雨水が小流となる所に生育する由であるが五家荘の場合も多少上記のような傾向が見られた。

以上のことからキュウシュウツチトリモチの分類学的位置，すなわち独立種か，ミヤマツチトリモチの変種か，あるいはミヤマツチトリモチの変異内のものか，の決定については更に詳細な比較研究が必要と思われる。また渡辺の論文中にある土佐稲叢山産のミヤマツチトリモチの写真の花穂の形は肥後の五家荘産のものと全く同じである点から見て四国産もおそらく九州産と同一型でないかと想像される。従って今後四国産と九州産との比較研究が望ましい。

2. **ヤクシマツチトリモチ**（新称） 屋久島の海抜600～700(～900m）の杉林内に一種のツチトリモチがあり多年観察を続けていたが一新種と思われるので発表する。本種は屋久島では通常ツチトリモチと混生して現われ外形もツチトリモチそっくりであるが，よく調べて見ると全体がツチトリモチよりやや小型で，花穂は黄赤色でキュウシュウツチトリモチとほぼ同色である。また，ツチトリモチは通常クロキ（稀にハイノキ，シロバイ，エゴノキ）に寄生し屋久島の高地ではオニクロキにも寄生するようであるが本種はクロバイだけに寄生する。さらに，花を解剖してみるとツチトリモチでは棍棒体は洋梨子形で先端は切形で中央に凹みがあり，子房は黄色であるが本種では棍棒体は棍棒状菱形で先端は円頭状で中央部に凹みはほとんど見られず，子房は赤色であるので直に区別出来る。

J. D. HOOKER はヒマラヤ産の *B. involucrata* HOOK. f. の花穂の赤色のものを var. *rubra*，黄色のものを var. *flava* と分けているが同一種内でも花穂の色に変異があるものとすると屋久島のものはツチトリモチの一変種と考えてよいかも知れないが上記のような色々の差異があるので取あえず別種としておきたい。

過日，正宗博士が小生の教室にみえられたのでこの屋久島のツチトリモチの話をした所，博士も御存知の由であったので博士と連名で発表することにした。

Balanophora yakushimensis HATUSIMA & MASAMUNE, sp. nov.

Planta parasitica ad radices *Symplocos prunifoliae* sita, 5–8 cm. alta, dioica simplex. Volva subcampanulato-cupliformis verruculosa, pallide flavo-fuscescentia, 1.5–2 cm. alta. Scapi cylindrico-teretes ca. 1–3 cm longi, rubescentes, a basi usque ad medium imbricatim squamati, squamis rubescentibus multis late ovatis ca.

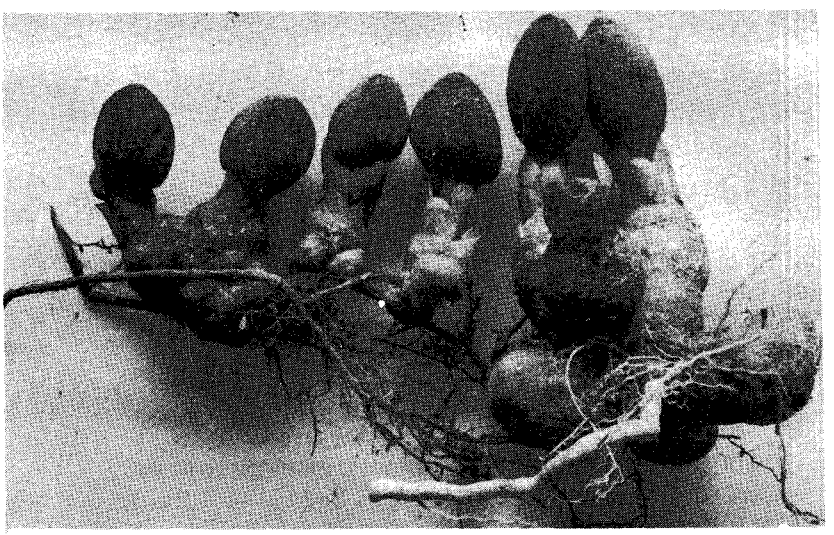
1-1.5 cm longis, apice subrotundatis. capitula ♀ : ovoidea, 1.5-3 cm longa, fulvo-rubescens, apice obtusa, corporibus clavato-rhomboideis apice obtusis vix depressis, ca. 1 mm longis basi stipitiformibus. Ovarium basi corporis dense congestum minutum fusiforme, rubescens.

Hab. Kyusyu : Isl. Yakushima, alt. 600-700 m., in *Cryptomeria* forest, Y. NAKAYAMA (type, in Herb. Facult. Agric. Kagoshima Univ.), Nov. 13, 1970, HASEGAWA, Oct. 22, 1970, S. SAKO 6555, S. HATUSIMA, Oct. 12, 1969

This is most closely related to *B. japonica* MAK. from which it differs by its not rubescent but orange colour of female head, its rhombic-clavate bracteoles with obtuse scarcely hollowed apices, its not yellow but reddish ovaries.

参 考 文 献

1. 渡辺清彦：日本産ツチトリモチ科植物の形態学的並に生態学的研究（其二） 植物研究雑誌 **18** (1942)293-308
2. 初島住彦：九州産植物分布新報 北陸の植物 **11** (1962)77
3. 遠藤正喜：ミヤマツチトリモチの新産地 植物研究雑誌 **30** (1964)63, fig. 1
4. ：ミヤマツチトリモチの新産地 大分県生物学会々報 **16** (1964)68
5. 大井次三郎：大日本植物誌 (1965)532-533, fig. 21
6. 平田正一：霧島山の植物解説 霧島山総合調査報告書 (1969)113
7. 南谷忠志：奥椎葉採集報告 しだのこ **1** (1969)10



Balanophora yakushimensis HATS. et MASAM. (left) and *B. japonica* MAK. (right larger one)